

Michael Snape,

God and the British Soldier: Religion and the British Army in the First and Second World Wars

井上 治

本書は、「近代世界におけるキリスト教と社会 (Christianity and Society in the Modern World)」シリーズの一環として二〇〇五年に刊行されたものである。同シリーズは、主幹マクレオドによる『大都市時代におけるヨーロッパの宗教』などに代表されるように、近代以降におけるキリスト教の影響力の推移を社会の多様な角度から考察することを目指すものである。本書『神と英軍兵士』で扱われているテーマは「現代戦争と世俗化の関係」であり、具体的にはイギリス現代史における安易な世俗化論に疑問を呈する内容となっている。著者は自身の祖父の経験を手がかりに、両大戦当時のイギリス軍兵士の精神状況はこれまでしばしば主張されてきた程には世俗的ではなかったのではないかという問題意識から議論を始めている。このように著者は世俗化論の再検討にあたって軍隊に注目したが、二〇世紀前半の両大戦は様々な点において現代社会を切り開く契機となったこと、また総力戦となった両大戦では軍隊が職業軍人に限らず多くの一般国民によつて

も構成されていたことから、現代史におけるキリスト教の役割を考察する上で、両大戦と世俗化の関係を再考する必要があるという本書の意図は要点を衝いているものと言えるだろう。本書の構成および概要は以下になっている。

Introduction

1. 'Diffusive Christianity' and the Religion of the Soldier

2. God and the Generals

3. Command and the Clergy: Generals, Chaplains and Morale

4. The Church in Khaki

5. Religion, Morality and War

6. The Army and Religious Philanthropy

Conclusion

序章において著者は関連研究史における本書の位置づけを説明しているが、そこで彼はまず「イギリス社会が啓蒙主義と産業革命の結果として世俗化された」という従来の世俗化論に疑問を投げかけている。著者が特に疑うのは、ウィツカムに代表されるような、第一次大戦がキリスト教会に破壊的な影響を及ぼしたという言説である。著者は、一九世紀末から二〇世紀前半のサザーク地区におけるキリスト教文化の根強い影響力をオーラルヒストリーの立場から明らかにしたウィリアムズの研究や^③、より広い観点からイギリスの世俗化の過程を検証し一九六〇年代までイギリスは確かに「キリスト教国」であったと主張するブラウンの研究

を評価し、この「修正主義的研究」も十分に踏まえた上でイギリス現代史における世俗化論に新たな一石を投じるものとして本書を位置づけている。また、軍隊と宗教の問題に関して、従来は軍事史と教会史が別々に扱われてきたために研究の空白が生じていたと指摘する。そこで、両者をつなぐ従軍チャプレンや市民的宗教団体の活動と役割に注目し、より広い視野から軍隊と宗教の問題を捉えることによって世俗化論を見直そうというのが本書の趣旨である。

第一章「拡散的キリスト教と兵士の宗教」では、両大戦期の兵士の間においてキリスト教が必ずしも影響力を喪失していたわけではなかったことを「拡散的キリスト教 (Diffusive Christianity)」というキーワードを用いて検証している。確かに一八五一年に実施された国民調査は、キリスト教会員が国民の半数にも満たないことを示すものであり、教会関係者に大きな驚きと失望を与えるものであった。数字上におけるキリスト教の影響力の低下は、その後の調査によっても明確に表れている。しかし著者はこの統計上の結果にも関わらず、イギリス社会が一貫して「キリスト教的」であったという事実にも注目する。キリスト教関連の出版物は二〇世紀に入ってから依然として高い発行部数を誇っていたし、一九二二年以降放送を開始したBBCもキリスト教的道徳の維持をその中心的課題としていた。「結局、一九一四年から四五年までのイギリスにおける宗教情勢は多様かつ複雑であり、一概に衰退とは言えない」のである。著者は教会出席者数ではなく「拡散的キリスト教」と言い得るものに注目するが、これは「倫理的に基礎づけられた非教義的なキリスト教」と説明されている。

この「文化的」なキリスト教は、エリートにあつては教育や司法の根幹原理として社会生活に大きな影響を及ぼすものであり、労働者階級にあつては暗黙かつ自明の道徳規範として影響力を保持しているものであった。そしてこれは大戦中の兵士にとつても同様であり、一見異教的な「お守り」や「占い」といったものも、キリスト教文化という大枠の中で共存していたのである。教会と国民との関係、教会へ行く者と行かない者との紐帯は二〇世紀に至つても確かに存在しており、「拡散的キリスト教がイギリスの宗教風景の主要な性格として残っていた」という事実は過小評価されるべきではないのである。

第二章「神と軍司令官たち」においては、両大戦当時の軍司令官のキリスト教理解とその軍隊への影響に触れている。これまでの多くの研究では、軍司令官の宗教性は良くも悪くも極端に敬虔な人物像の中で語られてきた。著者は彼らの宗教を特異なパーソナリティに帰すことは、当時の軍隊内に広範に存在した「実践的愛国的でかつ神学的には単純な信仰」を見失わせることになることと批判する。著者は、大戦期軍司令官となった人物の出身階層とともに、彼らが成長した時代に注目する。第一次大戦は勿論、第二次大戦においても軍司令官は、教会への出席や聖書の知識を持っていることが常識であったヴィクトリア時代の上流から中流階級の出身者であった。著者は具体的には、第一次大戦時のイギリス遠征軍 (BEF) 司令官ヘイグ (Douglas Haig) と第二次大戦の英雄モントゴメリー (Bernard Montgomery) に注目しているが、彼らは共にプロテスタント家庭に育った軍人であり、士気と規律の源泉として軍隊における宗教の役割を非常に重視していた。

このような背景はヘイグやモントゴメリーに限らず、多くの軍司令官にとっても同様であった。中・上流階級の家庭で植え付けられたキリスト教文化は、多くの軍人が進んだパブリック・スクールおよびヴィクトリア時代の軍隊内のエリートスによって再強化された。その彼らが第一次・第二次大戦の際に軍の責任者となった時、自らの経歴を振り返り頼むのは当然のことであり、その思想および習慣は両大戦期の軍隊内におけるキリスト教文化の維持と再強化に強い影響を及ぼすことになるのである。

第三章「軍隊指揮と聖職者」では両大戦における従軍チャプレンの役割について考察しているが、この従軍チャプレンの役割を描き出すことは本書における著者の主目的のひとつである。著者は、両大戦における従軍チャプレンの性格と役割はこれまで誤解されてきたと言う。ローマ・カトリックおよび国教会のチャプレンに関しては戦間期に流行した小説に見られるような誇張されたステレオタイプ（たとえば好戦的で勇敢なローマ・カトリックのチャプレンと無能な国教会のチャプレン）が強調される一方で、非国教会のチャプレンにはほとんど言及されてこなかった。また、多くの研究は教会のサークル内で行われてきたために、反戦主義的立場から従軍チャプレンの活動の重要性が意図的に無視され、軍隊や一般社会の中での位置づけが十分になされてこなかった。著者は本章で、従軍チャプレンは実質的には教会側の要請から作られたのではなく、むしろ軍側の要請であったことを強調する。つまり、しばしば指摘されてきたように、従軍チャプレンは歴史的残滓や宣教を目的とする制度、あるいは敬虔な軍司令官の特異な嗜好によるものではなく、近代イギリスの軍隊にとって士気の

高揚や規律・秩序の維持に関して重要かつ不可欠な役割を果たしたという「軍事的価値」が重要なのであり、このプログラムティックな認識が当時のキリスト教の性格をよく示しているのである。

第四章「軍隊の中の教会」では、両大戦期の軍隊において兵士がどのようにキリスト教と接していたのかについて述べている。

既に第一章で確認しているように、著者は教会への出席人数の如何では計れないキリスト教文化がイギリス社会に強く根付いていたことを強調していた。両大戦における市民の軍隊への参加は、軍隊に伝統的に存在したキリスト教的諸規定によって、このキリスト教文化をさらに強めることとなった。そのひとつの例として共同礼拝が挙げられる。一九四六年に至るまで原則的に強制参加であったこの儀式によって、一般社会では教会に行くことの無かった者が、軍隊内では定期的に礼拝に参加することになったのである。また従軍チャプレンや、第六章で述べるような軍隊内における諸々の宗教団体の活動もこの傾向に拍車をかけるものであった。そして何より、十字軍的な熱狂ではないにせよ、両大戦においてもキリスト教は依然として戦争の大義を担っていたのである。そしてこのキリスト教は、教義的要素が希薄であるとともにイギリス伝統文化と密接に結びついた国教会へと収束している。実際、第一次大戦当時国民の約六〇%が国教徒であったと言われるが、軍隊内では第一次・第二次大戦時共にその割合は約七〇―七五%であった。著者はその理由として、先の共同礼拝や信仰告白の機会の増大により自らが国教徒であると再認識する者が増えたこと、そしてもはや教義的な情熱を失っていた非国教徒が軍隊という歴史的に国教会文化が強い社会の中で、便宜上自らを国教徒と称す

ることが多かったことを挙げている。

第五章「宗教、道徳と戦争」では、戦時の道徳の問題にキリスト教がどのように作用したのかについて扱っている。「戦争の野蛮さと戦友の凶暴さ」という現実、敬虔なクリスチャンの信仰心を揺り動かし、従軍チャプレンに「国民的大義」と「キリスト教的博愛」というジレンマを突きつけた。しかし著者は、全体として教会が戦争の悲惨さを和らげる上で果たした役割が大きかったことを強調する。具体的には、「クリスマス休戦」の実施や戦地の教会が非戦闘地区として教護所などに当てられた事例が挙げられる。これらは敵味方ともにキリスト教徒であるという認識を前提としたものであり、かつその認識を再強化するものでもあった。このように著者は、「現代イギリス社会におけるキリスト教文化は戦争の野蛮さと深刻さを軽減するものとして作用し得た」と言うが、このような主張から著者が反論するのは、ウィツカムなどに見られる第一次大戦がイギリス社会を世俗化の方向に大きく動かしたという「歴史学というよりは文学的」な見解である。神を信じるのみならず「禁酒、節約、礼拝への出席」が敬虔であるとしてされた一九世紀的な理解ではなく、より広い意味でキリスト教を捉えるなら、二〇世紀におけるイギリスの軍隊も一概に世俗化していったとは言えないのである。

第六章「軍隊と宗教的慈善活動」では、戦時中の宗教団体の活動に注目している。両大戦とも戦時中には様々な市民の宗教活動が活発に行なわれたが、その活動の性質を評価するのが本章の目的である。著者が特に注目しているのがYMCAの活動である。

彼らは、酒保の運営や通信の補助あるいは講演やコンサート、映

画の提供を行なっていた超教派的キリスト教団体であった。著者は、その非常に活発な社会的活動の一方で宗教的・精神的影響力が著しく弱かった事実注目する。当時の関係者が述べているように、「YMCAの兵士に対する精神的活動はほとんど無かった」のである。本書で一貫して強調されているように、イギリスの一般国民、一般兵士におけるキリスト教は「倫理的で実践的」なものであった。その意味でYMCAのこのような活動は、「多くのイギリス軍兵士にとって、典型的にキリスト教的な活動」であった。それは「統一的な宗教的教義や動機を持つておらず」、兵士に宗教的回心を促すようなものではなかった。彼らの活動は、「キリスト教は神学的正統性や教会へのメンバーシップではなく、本質的には個人の善行」であるというイギリスにおけるキリスト教認識を端的に表すものだったのである。

以上のような議論を踏まえて、著者は三つの結論を示している。第一に、世俗化に関する問題である。二〇世紀前半のイギリス軍における宗教の状況は、一概に世俗的と言えるものではなく、キリスト教を中心とするその宗教文化は複雑かつ活発なものであったこと。第二は、宗教史の問題である。この時期の宗教状況を把握するためには、従来の研究のように、主要な教会人や団体、あるいは良心的兵役拒否といった特定のトピックに注意を傾けることだけでは不十分であり、軍隊や社会全体の思想状況に着目する必要があるということ。第三は、軍事史に関する問題である。これまで従軍チャプレンは周辺のなものとして扱われ、軍隊内における市民的宗教活動はほとんど説明されてこなかった。しかし彼らの活動こそ当時のイギリスの軍隊および社会におけるキリスト

教の性格を映し出すものであり、それらの役割を再評価することが求められるということである。

以下では、本書の意義といくつかの問題点を挙げてみた。本書の特徴は、第一次・第二次大戦を通じた時期を研究対象として扱っていることである。第一次大戦とキリスト教会の問題に関しては、ウィルキンソンの詳細かつ包括的な研究をはじめとしていくつかの研究があるし、また第二次大戦に関しては、より細分化された形で（ナチズムとの関係、ユダヤ人問題との関係など）研究がなされている。しかしこれらの研究内容は国教会が中心であり、その数も決して多くない。その中で二〇世紀前半という時期を対象として、世俗化論を踏まえたよりマクロな視点から戦争とキリスト教の関係を見ようという本書の試みは大きな意義を持つだろう。また、本書の趣旨は「現代戦争の経験とイギリス社会の世俗化の関係に対するこれまでの認識は誤解であり、根本的な訂正が求められている」というものであるが、言うまでもなくこの議論は宗教の定義そのものに依拠している。もとより社会における宗教性の問題は、宗教的か世俗的かという二者択一で表せるものではない以上、「拡散的キリスト教」というタームを用いることによって文化的に幅を広げてキリスト教の影響力を捉えようとする本書の視点は有効であろう。とくにイギリスにおいて大勢を占める国教会は著者も注目するように元来独自の神学を構築したわけではなく、多分にプラクティカルな性格をもって誕生した。二〇世紀前半の国教会を指導した聖職者テンブル（William Temple）が、「キリストは教会に行くことよりも善き生活を望ん

でいた」、「イングランドへのメンバーシップは私にとって最も根本的なものである」と発言していた事実はイギリスにおけるキリスト教の性格を端的に示している。軍司令官や兵士のキリスト教は、このような「実践的」、「文化的」あるいは「愛国的」なキリスト教であり、その意味を重視する本書の宗教理解は妥当であると同時に有益でもあるだろう。

一方で、本書の特徴でもある第一次大戦と第二次大戦を共に扱うという方法はいくつかの問題も含むだろう。本書は戦時中の書簡や手記に拠る部分が多く、戦間期が比較的軽視されているが、イギリスのキリスト教会にとって戦間期は大きな転換期であった。キリスト教諸教派の一致を目指すエキュメニカル運動や教会の世俗社会への介入を主張するキリスト教社会主義運動が進展したのはまさにこの戦間期であったし、テンブルとヘドラム（Arthur Headlam）の論争のように、キリスト教が「文化的」であるべきか「教義的」であるべきかという問題が盛んに議論されたのもこの時期であった。またオクスフォード主教ゴア（Charles Gore）などは、本書のキーワードである「拡散的キリスト教」という概念そのものは是非を問題とする著書を第一次大戦中に出版している。実際、この時期のキリスト教の「拡散化」は、一九三八年の報告書「国教会における教義」に見られるように、教会側の方針という側面があることも見逃せない。その意味では、一般民衆や兵士の中におけるキリスト教文化の存在を重点的に描き出す上で致し方の無いことも知れないが、これらの教会側の動向が全く触れられていない点は不十分さを残しているように感じる。世俗化論に関して言えば、単純な世俗化論に対する

反論は一九八〇年代から盛んになされており、このテーマ自体は決して新しいものではない。著者が直接の批判の対象とする研究もかなり古いものを中心であり、今日この種の世俗化論は通説とは言えないだろう。とはいえ、イギリスにおける近代以降の軍隊と宗教に関する研究は非常に少なく、世俗化論を踏まえたより広い視点からこの問題を実証的に明らかにしようとする本書の意義は決して小さくはないだろう。

- ① Hugh McLeod, *European Religion in the Age of Great Cities 1830-1930* (London, 1995).
- ② Edward R. Wickham, *Church and People in An Industrial City* (London, 1957).
- ③ Sarah Williams, *Religious Belief and Popular Culture in Southwark c. 1880-1930* (Oxford, 1999).
- ④ Callum Brown, *The Death of Christian Britain: Understanding Secularization, 1880-2000* (London, 2001).
- ⑤ Robert Graves, *Goodbye to All That* (London, 1929); Charles Bennstead, *Retreat: A Story of 1918* (London, 1930) 433p.
- ⑥ Alan Wilkinson, *The Church of England and the First World War* (London, 1978); Albert Martin, *The Last Crusade: The Church of Eng-*

land in the First World War (Durham, 1974) 433p.

- ⑦ Tom Lawson, 'The Anglican Understanding of Nazism 1933-1945', *Twentieth Century British History*, Vol. 14, No. 2, 2003, pp. 112-37; Donald J. Dietrich (ed.), *Christian Responses to the Holocaust* (London, 2003) 43p.
- ⑧ 戦時下の英兵 The Redcoat and Religion: The Forgotten History of the British Soldier from the Age of Marlborough to the Eve of the First World War (London, 2005) 243p. 著一六六部に引く戦時下の英兵の歴史や問題や扱いは28°
- ⑨ William Temple to John Stocks (3rd Oct. 1901), in Frederic A. Iremonger, *William Temple: Archbishop of Canterbury His Life and Letters* (London, 1948), p. 103; William Temple, *Mens Creatrix* (London, 1917), p. 210.
- ⑩ Charles Gore, *The Religion of the Church as Presented in the Church of England: A Manual of Membership* (London, 1916).
- ⑪ *Doctrine in the Church of England: the Report of the Commission on Christian Doctrine Appointed by the Archbishops of Canterbury and York in 1922* (London, 1938). 報告書で、教会体制や団体的復活や寓語に詳しく議論が展開され、433p. のような宗教や歴史については28°

(Routledge Taylor & Francis Group, London and New York, 2005, pp. xv+315)